

# 新名誉会員の紹介

(五十音順)

## 伊 理 正 夫 氏

昭和8年1月7日生  
現住所 墨田区東駒形  
本籍地 東京都



伊理正夫氏は、日本OR学会の揺籃期からの会員であり、ORの広範な分野の研究・普及に多大の貢献をされてられました。特に数理計画法やグラフ・ネットワーク・マトロイド関係の理論と応用、計算幾何学と地理的最適化、等の分野でのご活躍が著しく、また各種委員会の委員長や理事、副会長、会長も務められ、学会の運営にも多くの貢献をなされ、特に1983～85年にはIFORS副会長の重責を果たしておられます。この間、特にAPORSの発足には、特段のご尽力をいただきました。1992～94年にはAPORSの第3代会長を務められ、福岡で開催されたAPORS'94においては、国際プログラム委員長を自らお引き受け下さり、加盟各国からの参加・研究発表の勧誘に努められました。また、南半球の加盟学会（オーストラリアおよびニュージーランド）が、APORSの活動にいっそう積極的に参加してくれるように説得してまわれ、その結果、第4代会長はオーストラリアから選出され、次回の大会（APORS'97）もメルボルンで開催されることとなりました。

大学関係では、九州大学、東京大学、中央大学を合わせて35年余の長きにわたり、ORのみならず、数理工学を中心とする幅広い分野において教育および研究に励み、きわめて多数の論文・著書を著すとともに、高い見識と高邁な人格を以って幾多の後進の育成に努めてこられました。また、東京大学においては、多くの信望を得て、評議員、工学部長、総長特別補佐（副学長）等も併任され、教育・研究行政にも大きな貢献をなされておられます。これらの功績に対して、松永賞、東レ科学技術賞、など多くの賞が授与され、平成6年には産業教育110年記念教育功労者として表彰されました。さらに、数えきれないほどの国際学術雑誌の編集委員（長）、国際会議の組

織委員（長）、国際会議のプログラム委員（長）等を務め、学術の進歩と普及に大きく貢献してこられました。

理事会は同氏のご功績をたたえ、名誉会員に推挙することを決め、去る4月21日の総会に諮ったところ、満場一致で可決されました。ここにご報告を兼ね同氏に対し心から感謝の意を表したいと思います。

### 略 歴

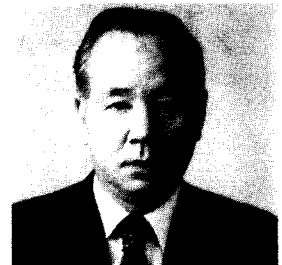
昭和30年3月 東京大学工学部応用物理学学科卒業  
昭和35年3月 同大学院数物系研究科応用物理学専門課程博士課程修了 工学博士  
同 年4月 九州大学助手  
同 年12月 同 助教授  
昭和37年10月 東京大学助教授  
昭和48年4月 同 教授  
昭和62年4月 同 工学部長併任  
平成元年4月 同 総長特別補佐併任  
平成5年4月 中央大学教授  
同 年5月 東京大学名誉教授

### OR学会関係

評議員 昭和46、53、～63、平成元年度  
理 事 昭和50・51・55・56年度  
副会長 昭和59・60年度  
会 長 平成4・5年度  
研究普及委員会委員長 昭和50・51年度  
論文誌編集委員会委員長 昭和55・56年度  
表彰委員会委員長 昭和59・60年度  
国際委員会委員長 昭和59・60年度  
フェロー 昭和62年  
IFORS副会長 昭和58～60年  
APORS会長 平成4～6年

## 國 澤 清 典 氏

大正4年10月17日生  
現住所 世田谷区深沢  
本籍地 東京都



國澤清典氏は、わが国にORが導入されてから今日まで、その研究・普及に多大の貢献をされてこられました。導入期における教育は日科技連のOR教育コース、普及は「オペレーションズ・リサーチ」誌が中心であり

ましたが、同氏は、委員長や顧問として、その育成・発展に尽力をされました。また、研究の発展を目指して設立されました当OR学会の発足に当たっては、その創立準備委員のお1人として参画されました。そして、初代の庶務理事として学会の基礎づくりに専心されました。その後、再度の理事や副会長、評議員なども歴任され、本会の発展には多大な貢献をなされておられます。

同氏は、「第1世代のOR研究者」にふさわしく、日本道路公団、日本国有鉄道、日本専売公社、国際電信電話(株)、三菱自動車(株)等多くの企業におけるOR活動の指導や共同研究に当たられ、これらの企業におけるOR活動の導入に著しい貢献をされると同時に、その研究の中で、独自のOR手法を創案されました。

さらに、東京工業大学および東京理科大学に、同氏が中心となって創立された情報科学科は、わが国におけるORの高等教育の場として、また、研究の場として、内外によく知られておられます。同氏は80才近くにられる今日でも、なお学生の指導に当っておられ、OR研究の一層の向上の一端を担っておられます。

理事会は以上のような同氏のご功績をたたえ、名誉会員に推挙することを提案し、去る4月21日の総会にて満場一致で可決されました。ここにご報告を兼ね、同氏に対して感謝の意を表したいと思います。

### 略 歴

昭和14年3月 大阪帝国大学理学部数学科卒業  
同 年4月 同科副手  
昭和17年3月 同科助手  
昭和19年12月 統計数理研究所員  
昭和24年5月 東京工業大学助教授  
昭和32年3月 同教授(数学科)  
昭和45年4月 同教授(情報科学科)  
昭和51年3月 同名誉教授  
同 年4月 東京理科大学教授(情報科学科)

### OR学会関係

評 議 員 昭和32~46年度, 53~62年度  
理 事 昭和32・33年度, 39年度  
副 会 長 昭和40年度  
フェロー 昭和47年  
授 賞 第8回日本OR学会普及賞  
そ の 他 刊行物委員長 昭和36, 37年度  
第7回IFORS国際会議組織委員会  
東京実行委員会委員長 昭和50年

## 後 藤 正 夫 氏

大正2年6月18日生  
現住所 世田谷区野毛  
本籍地 大分県



敗戦直後の混乱期に、一部の日本人は米軍の戦訓調査レポートや英国の首相であったウィンストン・チャーチルの『大戦回顧録』等から連合軍は作戦にあたって「OR」という新しい方法を採用して素晴らしい戦果を挙げていたことを知った。しかし、当時はその詳細は全く闇に包まれて知る由もなかった。その詳細が明らかにされたのは、1950年に発刊されたモースとキンボールの『Methods of Operations Research』であった。伏見康治先生が岩波の『科学』誌上で紹介されたのが、日本では初めてであったと記憶している。

当時統計基準局に在職され、職務上海外の情報に目を通しておられた後藤先生は、ORの重要性に瞩目され、先生を中心とするグループが先生の指導でORの研究に着手した。先生はORの黎明期における大先達であり、日本の『ORの揺籃期』にORを育て上げたのは、先生によって開眼したこのグループの人々であった。先生は1957年、日本オペレーションズ・リサーチ学会が発足するやその拡充に努力され、以後監事、理事、副会長(3期)、表彰委員長、評議員等の役員を歴任され、学会の運営に大いに寄与された。64年にはその学識および学会に尽力されたことによりフェローに、78年にはORの普及に対する功績により普及賞を受賞された。なお、52年にはデミング賞を受賞されている。先生は67年に行政監視庁統計基準局長を最後に永年勤められた官界を去られ、故郷の大分大学学長に3期8年間ご勤務され、この間大学紛争の解決に尽力。76年には大分県選出の参議院議員に当選され、以後3期選出された。その間89年には第1次海部内閣の法務大臣に就任され、93年議員を引退。以降悠々自適の日を送っておられる。

日本のORの先達であり、日本OR学会の創立に尽力され、以降絶えずORと学会の発展に寄与してこられた氏の功績を称え、今回理事会は同氏を名誉会員に推薦することとし、総会に諮ったところ、満場一致で可決されました。ここにご報告申し上げると共に、先生の今後のご自愛をお祈り申し上げます。

## 略 歴

昭和12年3月 横浜高等工業学校電気化学科卒業  
昭和34年1月 行政管理庁統計基準局長  
昭和43年1月 大分大学学長  
昭和51年10月 参議院議員 以後3期  
平成元年8月 第1次海部内閣法務大臣  
平成2年2月 退任

## OR学会関係

評議員 昭和32～43年度・46～50年度・平成4～5年度  
監 事 昭和32年度  
理 事 昭和34～35年度  
副会長 昭和37～38年度・45～46年度・50～51年度  
表彰委員長 昭和50～51年度  
フェロー 昭和39年

## 三 根 久 氏

大正11年3月26日生  
現住所 京都市西京区上桂  
三ノ宮町  
本籍地 佐賀県



三根久氏は、わが国におけるORの草創期より今日に至るまで、その発展に大きく貢献してこられました。特に、1956年社団法人大阪工業会にはじめてOR研究会を設けて以来、わが国のOR研究の先駆的な役割を担われ、1957年本学会創立と同時に、わが国初のOR入門書である「オペレーションズ・リサーチ」(宮脇氏、藤沢氏との共著)を刊行されました。氏の信頼性・安全性を中心とするORの研究の成果は、多数の論文および十数冊に及ぶ著作にまとめられています。また、この間、京都大学工学部数理工学科の計画工学講座の担任教授として、数多くの優れたOR研究者および実務家の養成につとめてこられました。

三根氏の国際的な活動もよく知られているところで、1967年にはORAW京都大会、1975年にはIFORSおよびTIMS国際会議の開催に多大の貢献をされました。また、日中学术交流にも積極的に務められ、上海鉄道大学、長春郵電学院、成都科学技術大学からそれぞれ名誉教授、また陝西省信頼性学会名誉会長の称号も贈られておられます。氏の活躍はさらに、1980年の超高信頼化システム技術、1983年の多値論理に関するそれぞれの国際シンポジウム、1990年IECのTC50およびTC75の環境試験に関

する国際会議の開催など、関連他分野においても顕著であり、国内でも、1990年に日本信頼性学会の初代会長(現顧問)に就任しておられます。

理事会は、以上のような同氏のご功績をたたえ、名誉会員に推挙することを提案し、去る4月21日の総会で満場一致で可決されました。ここにご報告を兼ね、同氏のOR普及・発展への貢献に対して感謝の意を表したいと思います。

## 略 歴

昭和23年 京都大学理学部数学科卒業  
同 年 大阪大学工学部通信工学教室研究補助  
昭和26年 大阪大学工学部助手  
昭和33年 工学博士(大阪大学)  
同 年 大阪大学助教授  
同 年 防衛大学校助教授  
昭和37年 防衛大学校教授  
昭和38年 京都大学教授  
昭和60年 京都大学名誉教授  
同 年 関西大学教授  
平成元年 同上大学定年退職  
現 在 日本科学技術連盟参与、関西電子工業振興センター参与

## OR学会関係

理 事 昭和39～40年度  
評議員 昭和39～54年度  
関西支部長 昭和50～51年度  
フェロー 昭和50年  
副会長、表彰委員長 昭和57～58年度  
普及賞 昭和60年度

## 会 合 記 録

5月9日(火)	機関誌編集委員会	14名
5月15日(月)	庶務幹事会	8名
5月17日(水)	理事会	16名
5月24日(水)	OA化委員会	4名
5月25日(木)	研究普及委員会	11名

## 第1回理事会議題 (7-5-17)

平成7年度事業計画及副会長の担務について  
平成6年度評議員会議事録の件  
平成6年度第7回理事会議事録の件  
平成7年度通常総会議事録の件  
入退会の件  
各支部総会報告の件  
平成6年度委員会委員・幹事委嘱の件  
各委員会報告(含、今年度の運営方針)